7 砺波市の特産物

富山県の中でも砺波市の農地は水田率が高いこともあって、砺波市の特産で最も一般的なのは米づくりであると言えます。しかし他にも、次のような特産物があります。

①チューリップ球根　②大門そうめん　③三助焼（さんすけやき）　④挽物木地（ひきものきじ）

⑤ゆず　⑥種もみ　⑦里いも　⑧白ねぎ　⑨玉ねぎ

A

B

C

D

E

F

LET'S WORK 7

上の写真は、どの特産品か考えてみよう。

チューリップの球根栽培

砺波の特産と言えば、まず名前が挙がるのは**「チューリップの球根栽培」**です。これは大正時代に**水野豊造**（ぶんぞう）が 10 球のチューリップ球根を栽培したことに始まります。

水野は、砺波平野が庄川扇状地の砂質土壌であることや、冬の積雪など自然条件がチューリップ栽培に適していることに着目しました。この後、幾多の試行錯誤を繰り返しながら、水田裏作として砺波地方に定着します。

1948（昭和 23）年には、富山県花卉球根農業協同組合が組織され、品質管理の徹底や栽培技術の向上が図られました。高度成長期には、球根の生産及び海外への輸出とも順調に伸びていきましたが、球根価格の低迷や後継者不足により、近年では栽培農家数や栽培面積の減少傾向が見られます。

8 砺波市の商工業

商　業

右のグラフからもわかるように、事業所数は近年減少の傾向にあり、2014（平成26）年にはここ数年間で最低の数となりました。ただし、年間の商品販売額は徐々に回復してきています。

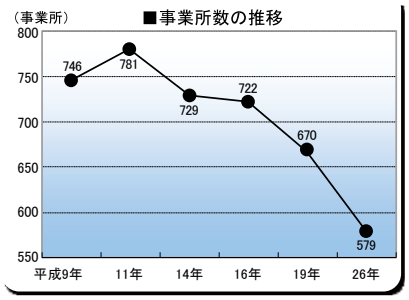
工　業

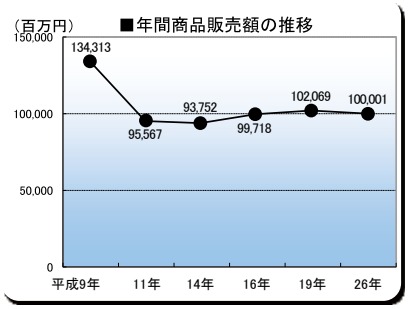
事業所数は2014（平成27）年以降減少傾向にあります。製造品出荷額等の推移は、2017（平成29）年にかけて上昇しましたが、翌年には減少しました。また、2008（平成20）年7月5日に**「東海北陸自動車道」**❶が全線開通しました。これによって、砺波から一宮ＩＣまで約3時間となり、東海地域がぐんと近くなりました。企業誘致や産業連携、企業取引の拡大を進めることで、工業の発展に結びつけようという動きがみられます。

❶ 愛知県一宮市から岐阜県を経由して富山県砺波市に至る、東海地方と北陸地方を結ぶ高速道路。総距離184.8㎞。

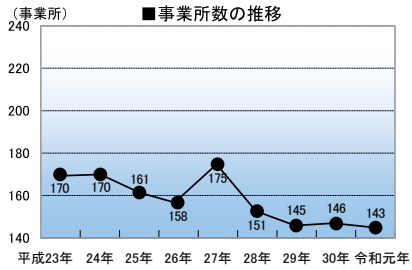
北陸コカ・コーラ砺波工場（砺波市東保）

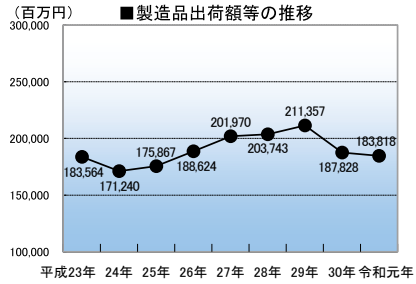
商業（飲食店除く）の推移（「統計となみ」より）



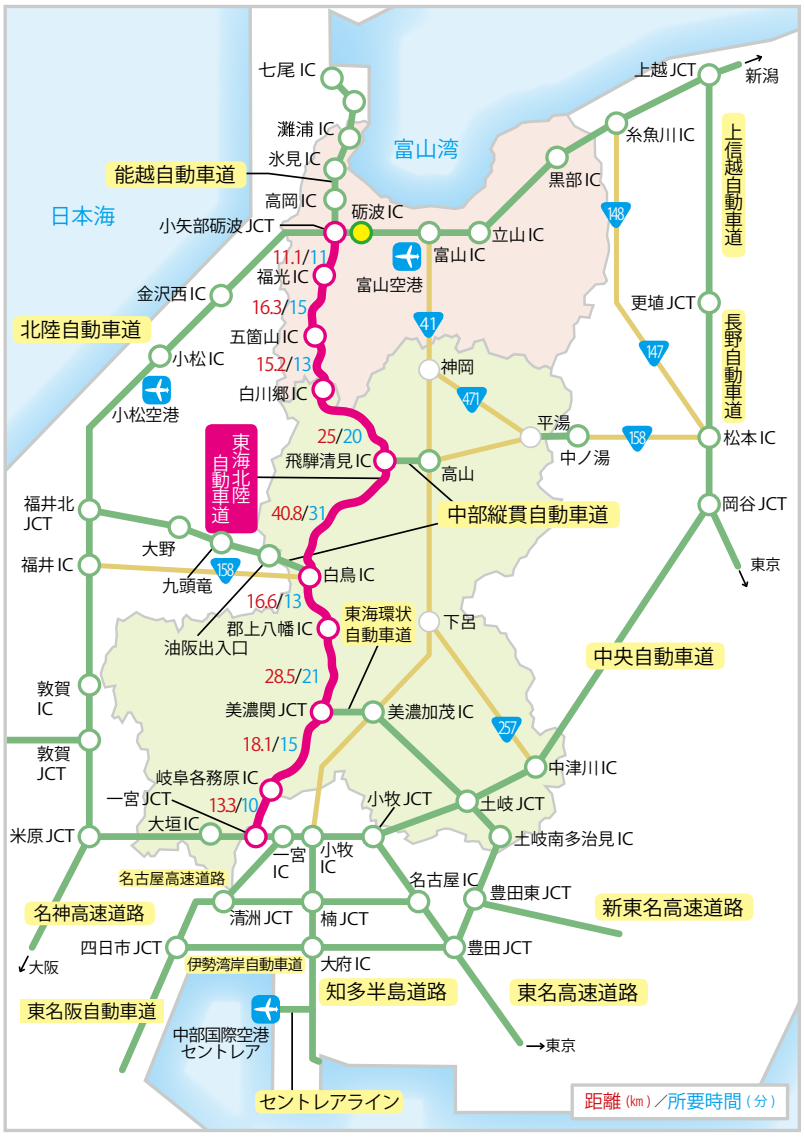


工業（製造業）の推移（「統計となみ」より）





東海北陸自動車道のルート



芹谷遺跡で発見された石器

①濃飛流紋岩や溶結凝灰岩をつかった石刃とナイフ形石器、彫器（芹谷遺跡の主体を占めるグループ）

②鉄石英や玉髄をつかった２～3cm の小形のナイフ形石器

1 砺波のあけぼの

旧石器時代は、**打製石器**を使って狩りや採集をしていた時代です。まだ土器が発明される前のことです。人々は獲物を求めて移動し、簡単な小屋や岩かげなどに住み、火を使って暮らしていました。

砺波市には、約２万年前❶から人が住みはじめたようです。

市内では芹谷野段丘や庄東山地で、旧石器時代の石器が多く見つかっています。とくに梅檀野地区に遺跡が集中しており、芹谷遺跡、池原遺跡、高沢島Ⅰ・Ⅱ遺跡などが知られています。

芹谷遺跡

芹谷遺跡からは、これまでに畑の表面から 100 点以上の石器が見つかっています。その石器は大きく２つのグループにわけることができます。

ナイフ形石器は、動物の解体や毛皮の加工などに使われました。彫器は、骨や木の道具をつくるのに使われました。南砺市祖山（旧平村）からはナウマンゾウ❷の臼歯の化石が発見されています。当時の人々は、そうした動物を獲物にして生活していたのでしょう。

小 ナウマンゾウの模型
（富山市科学博物館）

❶２万年前は、地質年代でいうと更新世（洪積世）にあたります。氷河期だったので、海水面が今よりも低く、日本列島は大陸と陸続きになっていたと考えられます。

❷ナウマンゾウは、１万５千年前まで日本列島の各地に生息していましたが、絶滅してしまいました。化石は富山市大沢野町と南砺市平地域の２箇所で発見されています。

2 花ひらく縄文文化

旧石器時代が終わり、稲作が伝わった弥生時代が始まるまでを縄文時代といいます。1万年以上もつづいた縄文時代は、日本の歴史でもっとも長く続いた時代です。人々は木の実やけもの、鳥、魚、貝などを食料にしていました。たて穴住居に住み、**縄文土器**を使って生活していました。市内では芹谷野段丘より東側の山地や庄川の上流部で遺跡がたくさん見つかっています❶。

❶原因はわかりませんが、縄文時代中期から遺跡が爆発的に増えます。市内の遺跡のほとんどが中期から後期の遺跡です。

石錘　網のおもり
（富山県埋蔵文化財センター蔵）

松原遺跡

庄川の上流部にある遺跡です。庄川の段丘の上から大正時代に見つかりました。

今からおよそ4,000年前の縄文時代中期に栄えた遺跡です。松原遺跡からは多くの土器が見つかっています。完全な形の土器が1棟のたて穴住居から20個以上出土したところもありました。

石器は、打製石斧や石錘が見つかっています。石錘は、細長くて平らな石の上下を打ち欠いて作った石器です。魚をつかまえる網のおもりや編み物の道具として使われました。庄川を泳いでいるサケやマス、アユをつかまえていたのでしょう。

旧庄川町には、このほか金屋ポンポン野遺跡があります。

LET'S WORK 8

どうして松原遺跡からたくさんの土器が出土したのか、考えてみましょう。

松原遺跡から出土した縄文土器　たて穴住居1棟からまとまって出土しました。（砺波市埋蔵文化財センター蔵）

ヘビの文様をつけた縄文土器　松原遺跡出土
（富山県埋蔵文化財センター）

たて穴住居
昭和49年に発掘されたときの様子
（松原遺跡）

発掘の様子　1976（昭和 51）年（厳照寺遺跡）

厳照寺遺跡

芹谷野段丘の上にある縄文時代中期の遺跡です。これまでにたて穴住居が 11 棟も見つかっています。住居は弧状集落の形で、典型的な縄文時代の集落といえます。住居の中から「埋甕」が見つかりました。埋甕は住居の床に埋めた土器で、亡くなった胎児を入れておさめ、おまじないをしたと考えられます。直径 16 cm、深さ 13 cm の土器が埋められていました。

この遺跡から出土する土器を「厳照寺式土器」といいます。この土器は、土器の外側に「蓮華文」や「爪形文」とよばれる文様があるのが特徴です。また、花弁の曲線を半截竹管（半分に割った竹）で模様をつけたものもあります。

徳万頼成遺跡の土偶
（砺波市埋蔵文化財センター蔵）
※ 写真はほぼ実大（高さ 9cm）

久泉遺跡

扇状地の扇央部にある遺跡で、縄文時代中期から後期にあたります。この遺跡からは、川原石を打ち欠いてつくった打製石斧とよばれる石器が 250 本以上出土しています。この石器は土を耕したり、穴を掘ったりする道具です。使い込んですりへったものや、半分で折れてしまったものが見つかりました。しかし、住居も土器も出土しないため、人々が生活していなかった遺跡と考えられます。

久泉遺跡は、ヤマイモやユリの根などの根茎類（地面の下に茎が育つ植物）を採集した場所だったようです。

久泉遺跡の打製石斧
（砺波市埋蔵文化財センター蔵）

LET'S WORK 9

打製石斧を使ってどのように植物を採集したのか考えてみましょう。

LET'S STUDY!

空白の時代

市内には、弥生時代の遺跡がほとんどありません。
それは人々の生活が植物の採集や動物の狩りから、稲作を中心とした生活に変化したことが原因です。稲作は多くの水を必要とするので、人々は水がにじみ出ている、扇状地の扇端部に移り住んだと考えられます。同じ理由で、古墳時代に入っても市内には人が定住しなかったので、有力者の古墳も造られませんでした。

中尾遺跡の御物石器
（福岡・厳照寺蔵）

3 東大寺の大仏と利波臣志留志

大仏の造営と砺波

743（天平15）年、大仏造営が財政的に行き詰まっていたので、聖武天皇は全国各地の豪族に寄付をもとめました。砺波地方の豪族、**利波臣志留志**（礪波臣志留志）❶はこれに応じ、747（天平19）年に米3,000碩（石）（約180ｔ）❷を東大寺に寄付しました。この量は、河内国（現在の大阪府）の河俣連人麻呂と並び、全国第1位です。志留志の功績もあって、752（天平勝宝4）年に大仏の開眼供養が行われました。

東大寺の荘園

743（天平15）年、米の生産量を増やすために「墾田永年私財法」が出されました。このことで貴族や寺院による土地の私有化が進み、日本各地に**荘園**❸がつくられました。砺波郡❹では8世紀中頃から土地の開墾が進み、東大寺の荘園が4ヵ所もつくられました。その荘園は、石粟荘、伊加流伎（伊加留岐村）、井山荘、杵名蛭荘といい、そのうち3ヶ所が現在の砺波市内につくられました。これらは、正倉院宝物である『東大寺開田図』などに描かれています。

767（神護景雲元）年、志留志は私有地100町歩（42.7万㎡）もの墾田を東大寺に寄付し、越中員外介（今の副知事）から伊賀守（今の三重県知事）に転じ、大出世をはたしています。このとき寄付した土地は、のちに井山荘となりました。

東大寺の荘園は、その後、10世紀ころまで続いたと考えられています。

LET'S WORK 10

なぜ、この場所に荘園がつくられたのか考えてみましょう。

東大寺の大仏
正式には盧舎那大仏といいます。

東大寺大仏殿
世界最大級の木造建築（奈良県奈良市）

❶利波臣の一族は、7世紀後半には利波臣氏を名乗り、小矢部川の中流域に本拠地があったと考えられます。
❷続日本紀に記される数字。東大寺の史料では5,000碩（約300ｔ）と書かれています。
❸「荘」とは私有地を経営するための事務所や倉庫のこと。このため私有地のことを「荘園」とよぶようになりました。
❹砺波郡とは、今の砺波市、南砺市、小矢部市、高岡市の一部を含んだ地域のこと。

久泉遺跡は荘園の西に位置しています。地中レーダ探査を行ったところ、遺跡から**大溝**が北東方向に約2kmにわたって続いていることが判明しました。人工的な溝は、荘園に向かって流れており、荘園を潤す農業用水路として機能していたことでしょう。遺跡からは「**溝所**」と考えられる溝の管理施設も発見されています。

発見された水田と溝

荘園に関連した遺構が見つかっています。荘園の推定地にあたる徳万頼成遺跡では平安時代の水田跡が見つかりました。石で固められた畦と水路、水田面には人や牛の足跡も残っていました。この発見によって、牛を使った稲作が荘園推定地の中で行われていたことがわかりました。

久泉遺跡からは、奈良時代から平安時代にかけての建物跡（掘立柱建物・たて穴住居）と大溝（大きな用水路）が見つかりました。大溝は幅が 6 ～ 10 mもあり、レーダ探査によって長さが 2 km も続くことを確認しました。久泉遺跡は、荘園のかんがい用水路とその管理施設と考えられます。

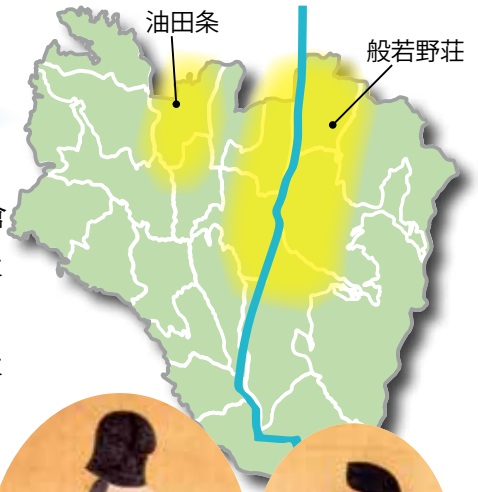
↑発掘された大溝　8世紀後半の用水路。人とくらべるとその大きさがわかります。（久泉遺跡）

↑石で固めた畦　平安時代の水田跡（徳万頼成遺跡）

東大寺領荘園ってナニ!?

奈良時代後半から平安時代前期にかけて、東大寺が大仏完成後の寺院経営の基盤をつくるため、大面積の開発が可能で治水に便利な越中や越前の北陸を中心に国の許可を得て占有した田地。砺波郡と射水郡に４か所、新川郡に２か所。正倉院や奈良国立博物館などに絵図が現存する。

4 般若野荘と油田条



奈良時代に成立した荘園制は、平安時代の終わり頃には衰退し、鎌倉時代になると再び盛んになりました。市内では、**般若野荘**と**油田条**という二つの荘園がありました。

般若野荘

般若野荘は、京都の公家である**徳大寺家**が領主となって平安時代末の12世紀に成立し、16世紀頃まで続きました。庄東・庄西地区を中心に広がっていた大きな荘園で、現在の“般若”という地名（般若・南般若・東般若など）の由来になっています。この地では二度、「般若野の合戦」がありました。

木曾義仲（源氏）の勝利

鎌倉幕府成立直前の1183（寿永2）年、源氏方の**木曾義仲**（源義仲）軍の今井兼平が般若野で平盛俊を破っています。その後、勢いがついた義仲軍は**倶利伽羅峠の合戦**で“**火牛の計**”という作戦によって西軍率いる10万の兵に対し5万の軍勢で大勝しました。市内には義仲軍が昼飯を食べたと伝わる午飯岡や、義仲が必勝祈願をした川田八幡宮（西宮森八幡宮）など義仲ゆかりの地があります。

木曾義仲（徳音寺）

今井兼平（徳音寺）

名越朝時（幕府方）の勝利

1221（承久3）年に幕府と朝廷の対立が表面化し、後鳥羽上皇が政権奪回を企てたことで**承久の乱**が起こりました。越中では**名越朝時**の軍勢が般若野で戦い、上皇方の勢力を降伏させています。その後、武士の台頭とともに荘園を管理する地頭が勢力をのばし、14世紀後半には領家方（荘園領主）と地頭方で**下地中分**（土地の支配を分けること）が行われました。近年の発掘で、般若地区の徳万頼成遺跡から荘園時代の道路と建物の跡が見つかっています。

川田八幡宮（砺波市高波）

午飯岡（砺波市小島）

油田条

油田条は、もとの庄川（旧千保川）をはさんで般若野荘の西側に広がっていた荘園です。現在の油田地区を中心とした場所と考えられます。

この荘園は鎌倉時代の13世紀後半に鎌倉幕府御家人の**平賀氏**が領主となったのがはじまりです。南北朝時代の14世紀には足利尊氏の部下である**町埜善照**に与えられ、町埜が京都の太秦安楽院に寄進しました。しかし、南北朝時代、2代将軍の足利義詮の手違いで貴族の冷泉家にも油田条の所有を認めてしまったので、120年間もの間、争いが続きました。

公卿九人塚　般若野荘領主の徳大寺実通が越中下向の際に殺害され、葬られたと伝わる塚（砺波市安川）

“火牛の計”の復元模型（小矢部市埴生）

↑現在の増山城と城下町

旧石器 | 縄文 | 弥生・古墳 | 飛鳥 | 奈良 | 平安 | 鎌倉 | 室町 | 安土桃山 | 江戸 | 明治 | 大正 | 昭和

↑増山城と城下町復元図

5 増山城をめぐる争乱

増山城は、南北朝時代から江戸時代まで使われた城です。越中三大山城❶のひとつに数えられ、国の指定史跡になっています。

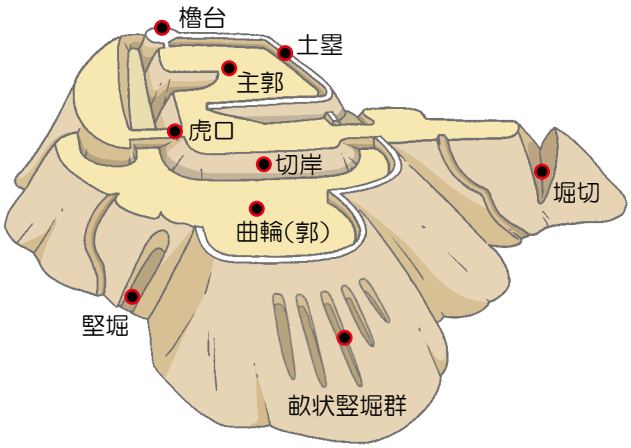
山城の典型例

増山城は、平地や小高い丘に天守閣などをもつ「**平城**」や「**平山城**」とはちがい、山そのものを土木工事によって城につくり変えた「**山城**」とよばれるタイプの城です。日本全国の城のうち、99％以上を占めるのが山城です。増山城は富山県を代表する典型的な山城です。

戦国時代の山城は、山を切り盛りして、曲輪・土塁・堀切などをつくりました。こうしてできた城の構造のことを**縄張**といいます。また、山城は自然地形を生かしてつくられました。上杉謙信は増山城のことを「元来嶮難之地」（もともと険しい場所である）と書状で述べています。

増山城は北に亀山城、孫次山砦といった支城❷を備え、和田川をはさんで対岸に城下町がつくられました。

❶ 砺波市の増山城、高岡市の守山城、魚津市の松倉城をあわせて越中三大山城といいます。
❷ 本城を守るための出城



山城の模式図

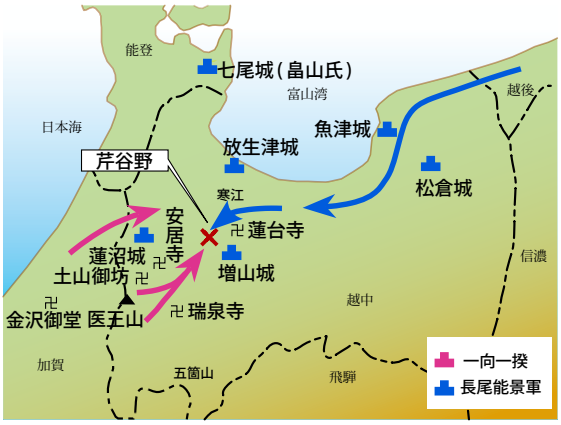
増山城の関係年表

西暦	年号	出　来　事
1362	貞治元	二宮円阿が和田城などで桃井勢と戦う
1506	永正３	芹谷野の合戦
1560	永禄３	長尾景虎（上杉謙信）が越中に出兵 神保長職は富山城から増山城に逃げる
1562	永禄５	上杉輝虎（謙信）が神保長職を攻め、 増山城周辺を放火する
1566	永禄９	神保長職が上杉氏と結び、一向一揆と 戦う
1576	天正４	上杉謙信が増山城を攻め落とす
1581	天正９	織田信長の勢力が増山城を攻め落とす
1585	天正 13	佐々成政が増山城を普請する
1586	天正 14	上杉景勝が上洛途中、中田で増山城主 中川光重のもてなしを受ける
1603	慶長８	蕭が没する

芹谷野の戦い［砺波市梅檀野］

1506（永正３）年

越中・加賀の一向一揆 ⚔ 越後守護代 長尾能景 / 越中守護代 神保慶宗



増山城の歴史

増山城は、かつて「**和田城**」とよばれていました。南北朝時代の 1362（貞治元）年には、元越中守護・桃井直常らを攻めるために幕府方（斯波方）の二宮円阿が和田城を守ったとの記録があります。

越中守護・畠山氏❶の守護代として射水・婦負両郡に勢力をもった神保氏は、放生津城（射水市）を本拠とし、重要な支城だった増山城を 15 世紀終わり頃に整備したと考えられます。

❶ 河内国・紀伊国・越中国の守護。越中国には不在だったので、遊佐・神保・椎名の３氏を守護代とした。

芹谷野の合戦

1506（永正 3）年、越後守護代である長尾能景（上杉謙信の祖父）は神保慶宗と手を組み、「**芹谷野の合戦**」（芹谷の合戦）で一向一揆方と対決しますが討ち死にし、その子・為景も越中に攻め入り、戦乱が続きます。

1543（天文 12）年、神保長職は富山城を築き、増山城は西の支城となります。その後、“越後の虎”とよばれた上杉謙信は増山城を 3 度も攻撃しました。

織田勢の侵攻と佐々成政

謙信の死後、織田信長勢は北陸への進撃を強め、増山城と木舟城（高岡市）で上杉勢と交戦しました。1583（天正 11）年、織田方の部将である佐々成政❷が越中を平定しました。増山城は佐々氏の支配下となり、整備拡充が図られたと考えられます。成政は、小牧・長久手の戦いで豊臣秀吉と敵対していた織田信雄・徳川家康と結んで、秀吉方の前田利家と加賀・越中の国境で交戦していました。しかしその後、成政は戦うことなく秀吉の軍門に降り、城は前田方の支配となりました。

❷ 尾張国の武将。織田信長の死後、秀吉と敵対した。家康に応援を求めるため、冬の立山をこえた「ザラ峠越え」が有名。

宗半塚　宗半（光重）が葬られたと伝わる塚（砺波市庄川町庄字金剛寺）

最期の城主・中川光重

その後、利家の重臣、中川光重（巨海斎宗半）が城主となりました。光重は不在期間が長く、実質的には妻の蕭が城を守り、江戸時代のはじめに廃城となったと考えられます。

6 近世の砺波

前田氏の支配

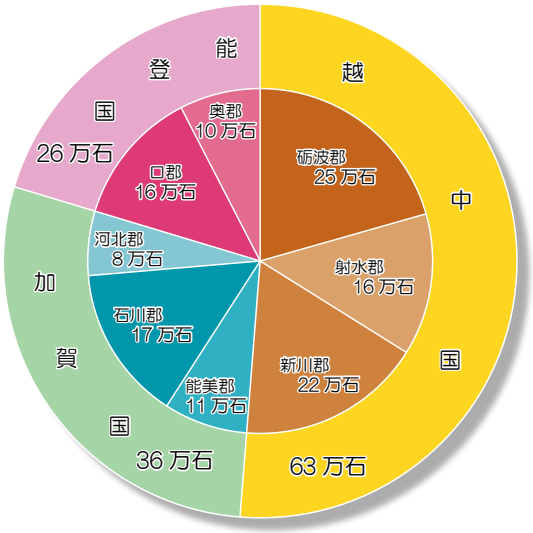
戦乱の世が治まって、越中の国は前田氏の領有となりました。加賀・能登・越中を領有する前田氏の「**加賀藩**」は、「加賀百万石」と呼ばれ、全国一の石高を持つ大藩でした。「**石**」というのは米の量を計る単位で、江戸時代の経済は米をもととしていましたから、石高がその藩の経済力であったといえます。

加賀藩の支配する越中国は江戸時代を通して、砺波郡・射水郡・新川郡・婦負郡の 4 郡でした。（注　ただし、のちに婦負郡と新川郡の一部は富山藩となります）

加賀藩は江戸時代の終わりごろには 125 万石となりますが、そのうち 25 万石は砺波郡の生産高でした。江戸時代の砺波郡の領域は、現在の砺波市、南砺市、小矢部市、高岡市の南部を含みます。

加賀藩の領域図

（文化年間のもの、ただし幕府領で小領域のものは省略）



加賀藩領内の石高割合
（加賀藩総高 125 万石）

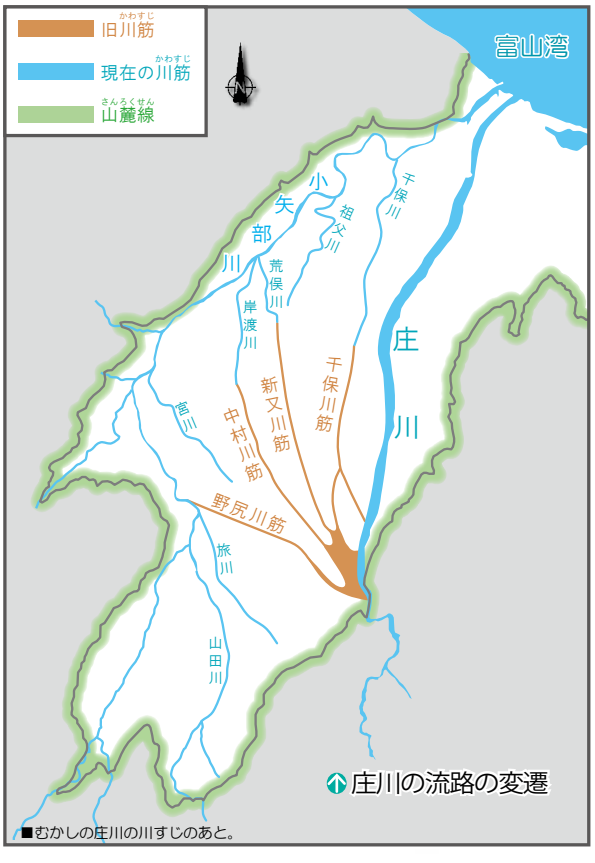
・「奥郡」は珠洲郡と鳳至郡、「口郡」は羽咋郡と鹿島郡のこと
・嘉永 7 年「諸郡総高平均免数等摘要」（杉木文書）より作成
（『加越能近世史研究必携』所収）

庄川の治水

庄川が現在の河道に固定されたのは、加賀藩の支配になり、上流から下流まで統一した堤防が築かれてからのことです。それ以前は、庄川町金屋付近で山から出た庄川は、幾筋もの分流となり、扇を広げたように砺波平野へ注いでいました。

もっとも古い庄川の流路は、金屋付近でおおむね北西へ流れ、小矢部市下川崎付近で小矢部川に合流していたと考えられています。その後、野尻川・中村川・新又川・千保川というふうに、だんだん主流が東へ移ったと考えられています（**庄川の東遷**）。

そして、庄川の主流が現在の流路になったのは、1586（天正 13）年に起きた大地震以降のことです。しかし、その後も、大雨の降るたびに庄川は洪水をくりかえして人々の生活をおびやかしました。そこで加賀藩は、1670（寛文 10）年から庄川出口の弁才天前で大堤防を築きました。完成まで 44 年もかかった難工事でした。のちに堤防上には補強のために松が植えられたので「**松川除**」と呼ばれるようになりました。



庄川の流路の変遷

History

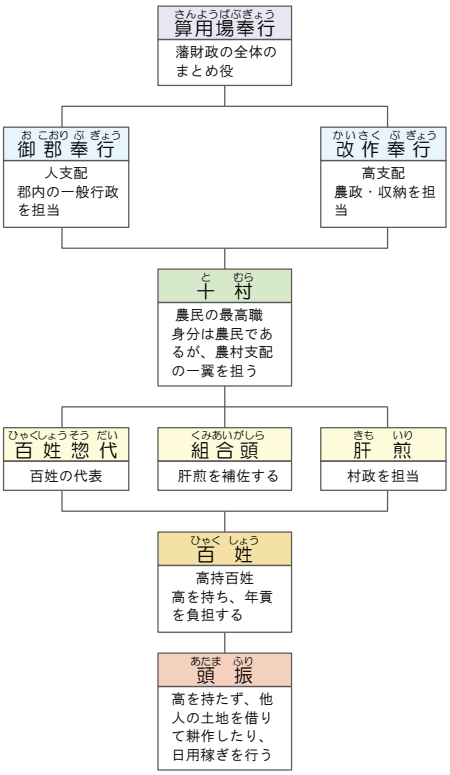
松川除の図　（射水市高樹文庫蔵）

新田開発

江戸時代以前の砺波平野では、洪水の比較的少ない微高地に居を定め、まわりの土地を開拓して村々が生まれ始めていました。その開拓が急速に進んだのは、庄川に堤防が築かれてその流路が固定されてからのことでした。河道の古い西から順に、野尻川跡、中村川跡、新又川跡と開発は進みました。最後に、松川除が築かれる前の主流であった千保川跡が残されていたのですが、そこにも 1820（文政 3）年に新開用水（現在の舟戸口用水）が引かれ本格的な開発が始まりました。

また、段丘上で水の便が悪く米作りができなかった所へも用水を引き、新たな村が生まれました。そのもっとも大きな開拓が行われた所が、芹谷野用水の引かれた芹谷野段丘です。

加賀藩農村支配のしくみ



村のくらし

村人には、田畑を持って年貢や諸役を負担する高持百姓（本百姓）と、田畑を持たず地主の下で小作を行う頭振（水呑百姓）とよばれる階層の百姓がいました。村の役人は肝煎・組合頭とよばれ、裕福な高持百姓の中から選ばれ、村のまとめ役となっていました。その上には数十ヵ村をまとめる**十村**がいました。藩と村の連絡はすべて十村を通してなされました。

この時代、年貢を納めることが百姓の第一の義務だと考えられていましたが、それぞれの土地には肥えた土地、やせた土地、また、水害や干害の被害を受けやすい土地などさまざまな条件の違いがありました。その不公平をなくすために、加賀藩では、ほぼ 20 年に一度、村の中で各自の耕作地をくじ引きで交換する「**田地割**」がなされました。

藩に納める年貢は、個々の百姓が直接納めるのではなく、十村を中心とする村役人が責任を持って村単位で納めなければなりませんでした。そのため、各村では、人々は互いに助け合って暮らしていました。田植えや稲刈りなどは共同作業で行い、共同利用する入会地や用水の管理などのために、村おきてなども作られました。